

なにわの元プロ野球選手②

元南海内野手 森下 正夫さん (78)

オールスターファンには懐かしい、南海ホークス(現在のソフトバンク)の黄金期を支えた森下正夫さん(78歳)は、愛知県内で今も野球漬けの日々を送っている。現役15年で盗塁王1回、ベストナイン2回。親分 鶴岡一人監督のもと、一瞬のスキを見逃さない「クセ者」として存在感を放った。ユニフォームを脱ぎ、評論家を退いた今も、地元で少年野球チーム「愛知長久手ポイズ」の総監督として、後進の指導に情熱を燃やしている。

(フリーライター・吉岡雅史)

念願の少年野球チームを率いて11年目、ついに教え子からプロ野球選手が誕生した。

「ハヤタはやりよるで。金本の後釜に十分なれると思う」

そう太鼓判を押すのは、阪神ドラ

フト1位の伊藤隼太外野手のことだ。中京大中京から慶応大学とエリート街道を歩んできた伊藤の基礎は、中学時代に森下さんが築いた。

選手で15年、古巣南海のほか中日などでコーチ、さらに日本人で初めて

台湾プロ球界の監督にもなった百戦錬磨の恩師が、舌を巻く。「チャンスに強いのが魅力やけど、ハヤタの立派なところは、練習で打撃投手にしてもマシンにしても、調子が悪くてボール球が続いても、いやな顔ひとつせんこと。立派な態度をとりよる」

俊足を武器に 2年目でレギュラー獲得

森下さんが南海に入団したのは1952年(昭和27)。福岡の八幡高校2年のときに、学年を間違えたプロ5球団が勧誘に来たことをきっかけに、「親孝行がしたい」と中退を決意し、1年間は実質南海の2軍だったノンプロの南海土建でプレーしてからのプロデビューだった。

当時の南海は「百万ドルの内野陣」

年連続50盗塁は、長い球史の中でも阪急・福本や阪神・赤星ら、わずか5人しかいない。

日本シリーズで「森下劇場」全開

59年の巨人との日本シリーズだった。南海の連勝で迎えた第3戦は、9回裏に巨人が同点に追いつき、なおも1死三塁。森の打球はレフトのほぼ定位置へ。サヨナラ負けが濃厚な土壇場で、サード森下は、三塁ランナー・広岡がタッチアップの態勢に入るや、走路にスツと足を差し出した。スタートが遅れた広岡は本塁でタッチアウトとなり、延長10回に南海が1点を勝ち越した。翌日の新聞は、本塁へ滑り込まなかった広岡を戦犯として批判した。

星野仙一が一目置く 史上最高の「クセ者」



しぶとい打撃が持ち味だった南海時代の森下さん

のうち、3人が不動のメンバーとして君臨していたが、2年目から主に三遊間でのスタメン出場が当たり前に。「日本一のサード藤山和夫、日本一のショート木塚忠助」と評された名手2人を押しのけたわけだ。

俊足を武器に、54年と61年にベストナイン。オールスターにも4度選ばれ、MVPを2回獲得している。54年から3年連続で50盗塁をマークし、55年には59個で盗塁王に輝いた。3

そもそもアピールされれば走塁妨害である。そう質問すると、森下さんは「試合が決まる場面、誰が関係のないサードの動きを見るっちゃううねん？全員打球を見るがな。だいたい、ブライドの高い広岡が、証拠もなければ審判も見えていないプレーに抗議するわけがないな」と自慢げに答えた。このシリーズは、大エース杉浦の4連投4連勝が語り継がれているが、陰ではこんな事件があったのだ。

「森下劇場」は公式戦でも上演された。ある試合で、三塁ランナー森下はホームスチールを企てようとした。しかし、相手に見抜かれ、そのまま走れば100%アウトの窮地。すると希代のクセ者は、とっさに「タイム、タイムっ！」と大声で叫ぶと、審判もタイムを認めてしまった。しかし、敵にア

ピールされれば一巻の終わりだ。一塁ベースコーチだった指揮官の元へ向かい、「親分、とにかく殴って下さい」と懇願し、鶴岡監督も訳が分からなままパンチを浴びせた。「すいませんでした。気をつけます」と平身低頭しながら塁へ戻り、プレー再開となった。

要するに、森下がサインを見落とし、監督に怒られただけ——というシーンをでっちあげ、ウヤマヤにしてしまったのである。

相手からは、嫌がられることこの上ない選手だったが、苦勞も他人以上にあつた。アキレス腱断裂という致命的なケガを、実に3度経験している。医学の発達した現代と違い、そのころアキレス腱を切って復活した選手は野球に限らず皆無だった。「左2回、右1回。それでも3回復活したのは世界中でワシだけや」と豪語する。医者か

ら無理と宣告されながら、不可能を可能に変え続けた努力と執念の人でもあつた。

「熱い男」どうして結んだ 星野仙一との絆

「南海といういいチームで、常にチームプレーを考えていたから、いつしかこんなプレースタイルになった。個人成績は1度も考えたことがなかったなあ。でも選手15年で1度も年俵ダウンはなかった。コーチの15年間はすべて1年契約で、1度もクビにならないかった」

コーチ生活の大半を占める9年間を中日で過ごし、就任1年目にはルーキー星野仙一に鉄拳制裁を浴びせたこともある。しかし、互いに熱い男。通じるものがあつた。



2011年1月、かつての教え子・伊藤隼太と談笑する森下さん(愛知長久手ポイズ提供)

星野監督1期目に、評論家だった森下さんは2度臨時コーチとして招かれ、第2期星野政権時には「うちの若手に野球を一から教えてやって下さい」と、アドバイザー就任を要請された。これは星野氏の電撃退団・阪神監督就任で幻となったが、闘将・星野が森下さんの野球哲学に心酔してい

「車いすでも教える」 永遠の野球小僧

若手選手への関心は、次第に将来を担う子どもたちへと向けられていく。元々ポイズリーグは恩師・鶴岡氏が設立した組織。「監督の葬式のあと、あれこれ考え、次の日には行動に移して」と、翌2001年にチームを立ち上げ、73歳で評論家活動に終止符を打つと、指導1本の生活に。後進の育成を「野球への恩返し」と位置づけ、取り組んでいる。

「子どもには、車いすに乗ってでも教えにくるからな」と言うてるんや。史上最高のクセ者は、永遠の野球小僧でもある。

